

令和元年度(2019年度) 研究員派遣による学校支援に関する研究

目的に応じて「読むこと」および「書くこと」の資質・能力を 育成する小学校国語科の授業づくり

－「情報の扱い方に関する事項」を関連させて－

内容の要約

平成30年度全国学力・学習状況調査において、本県の子どもたちは、自分の考えを適切な根拠をもとに説明したり、文章の趣旨や問われていることを把握したりすることに課題がある。本研究では、派遣研究員受入校の指導者と協働で、「情報の扱い方に関する事項」と「読むこと」「書くこと」を相互に関連させ、年間を見通して育成する資質・能力を明確にした授業づくりに取り組んだ。さらに、児童が学びを自覚し、自身で学びをつなげることができるよう「学びの足あとシート」を作成・活用した。これらの取組により、目的に応じて「読むこと」「書くこと」の資質・能力が高まった。

キーワード

目的に応じて
学びの自覚

「情報の扱い方に関する事項」
学びのつながり

指導の意図の明確化
「学びの足あとシート」

目	次
I 研究の目標	(1)
II 研究の仮説	(1)
III 研究についての基本的な考え方	(1)
1 目的に応じて「読むこと」「書くこと」の資質・能力とは	(1)
2 「情報の扱い方に関する事項」を扱うことについて	(1)
3 学びがつながる工夫	(2)
IV 研究の進め方	(4)
1 研究の方法	(4)
2 研究の経過	(4)
文 献	
I 「読むこと」の研究の内容	(5)
1 目的意識をもって読むことができる場面の設定	(5)
2 段落相互の関係を捉える学習活動	(6)
3 学びのつながりを重視した授業づくり	(6)
II 成果と課題	(8)
I 「書くこと」の研究の内容	(10)
1 育成を目指す資質・能力を明確にした授業	(10)
2 児童の思考の流れに沿った単元構成	(11)
3 振り返りシート等を用いた児童の見取りと活用	(13)
II 成果と課題	(14)

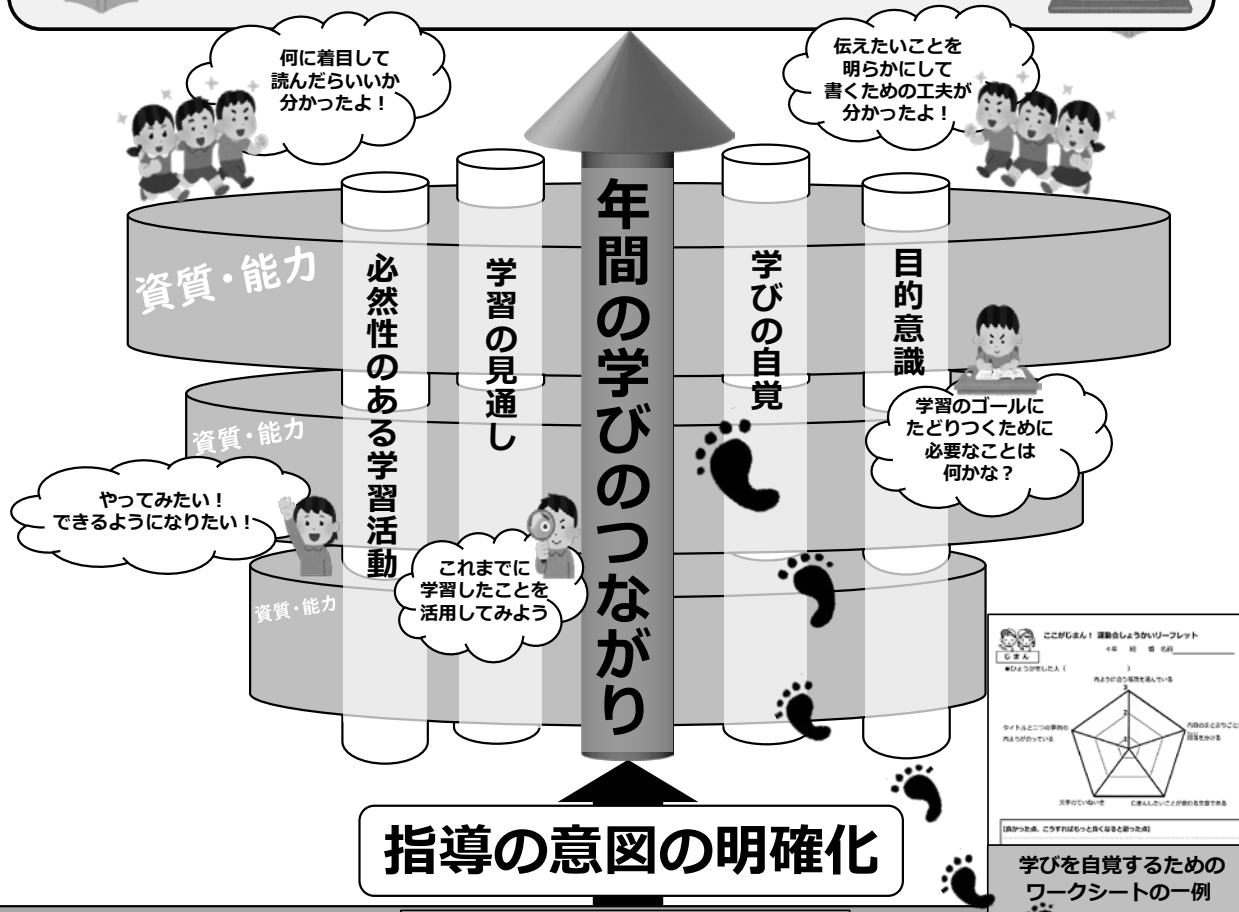
滋賀県総合教育センター

谷 口 美 樹 立 木 理 絵



目的に応じて

「読むこと」「書くこと」ができる児童



授業づくりに役立つシート

①マトリックス型の年間指導計画

指導事項	情報	書くこと	読むこと
教材名			

②教材分析シートⅡ

指導事項

教材

言語活動

③単元プランシート

単元	学習の目標	学習の計画	学習の振り返り
1			
2			
3			
4			
5			
6			
7			

④学びの足あとシート

学習の足あと	学習の振り返り
1	
2	
3	
4	
5	
6	
7	

課題

(読むこと)

- 学習課題を見つける力
- 文章の趣旨や問われていることを把握する力

(書くこと)

- 必要な情報を選び、書く力
- 適切な根拠をもとに説明する力

課題解決のヒント

情報の扱い方に関する様々な知識や技能を蓄積すること

情報の扱い方に関する指導の改善・充実

小学校学習指導要領(平成29年告示)

研究員派遣による学校支援に関する研究

目的に応じて「読むこと」および「書くこと」の資質・能力を 育成する小学校国語科の授業づくり

－「情報の扱い方に関する事項」を関連させて－

I 研 究 の 目 標

「情報の扱い方に関する事項」と「読むこと」および「書くこと」を相互に関連させて、児童の中で学びがつながる工夫をし、目的に応じて「読むこと」および「書くこと」の資質・能力を育成する小学校国語科の授業づくりに取り組む。

II 研 究 の 仮 説

小学校国語科において、派遣研究員と派遣研究員受入校の指導者が育成を目指す資質・能力を明確にする。特に、児童の学びのつながりを大切にして、「情報の扱い方に関する事項」と「読むこと」および「書くこと」を相互に関連させた授業づくりを行うことにより、目的に応じて「読むこと」および「書くこと」の資質・能力の育成につながるだろう。

III 研究についての基本的な考え方

1 目的に応じて「読むこと」「書くこと」の資質・能力とは

小学校学習指導要領(平成29年告示)解説国語編(以下、学習指導要領解説という。)には、指導事項として「目的に応じて」読んだり、「目的や意図に応じて」書いたりすることの資質・能力を育成するよう系統的に整理されている。

一方、平成30年度全国学力・学習状況調査の結果から、本県における子どもの学力に関する課題の一つとして、自分の考えを適切な根拠をもとに説明すること、文章の趣旨や問われていることを把握することが挙げられる。

そこで、本研究では、目的に応じてどのように読んだり書いたりするか自ら選択しながら、単元の言語活動を遂行できる児童の姿を目指す。例えば、第3学年の教材文「すがたをかえる大豆」(光村図書)を用いた学習では、筆者の説明の工夫を見つける目的であれば文章の構成や表現に着目し、作者の伝えたいことを捉える目的であれば中心となる言葉や文に着目し、大豆の食べ方の工夫について自分の考えを形成する目的であれば事例の内容に着目して詳しく読む必要がある。同じ教材文でも、目的に応じて必要な情報は変わるため、どのような情報が必要かを判断しながら読むことが児童にとって大切である。そのため、目的に応じて必要な情報を捉えて読んだり、情報を適切に用いて書いたりする力を育成したい。このような力を、目的に応じて「読むこと」および「書くこと」の資質・能力と捉え、授業づくりに取り組むこととする。なお、ここでは、単元全体で資質・能力を育成するための学習活動を言語活動として位置付けることとする。

2 「情報の扱い方に関する事項」を扱うことについて

学習指導要領解説には「話や文章に含まれている情報を取り出して整理したり、その関係を捉えたりすることが、話や文章を正確に理解することにつながり、また、自分のもつ情報を整理して、その

関係を分かりやすく明確にすることが、話や文章で適切に表現することにつながるため、このような情報の扱い方に関する『知識及び技能』は国語科において育成すべき重要な資質・能力の一つである¹⁾と示されている。つまり、情報の扱い方に関する様々な知識や技能を蓄積することにより、どのように読んだり書いたりするかについての選択肢を増やせるということである。

このことから、「情報の扱い方に関する事項」を扱った授業づくりの充実を図る必要があり、また、「情報の扱い方に関する事項」は「知識及び技能」として位置付けられていることから、理解したり表現したりする様々な場面で活用できるように「読むこと」「書くこと」と相互に関連させた授業づくりを行うことが効果的であると考ええる。

3 学びがつながる工夫

派遣研究員受入校の課題を把握し、学校支援の内容に生かすため、指導者の意識調査や聞き取りを行ったところ、図1のような課題が挙げられた。このことから、授業づくりにおいて、指導者が指導の意図を明確にすることの必要性がうかがえる。

(児童の姿から)

- ・児童自らが学習課題を見つけ、解決するために読もうとすること
- ・多くの情報から必要なものを選び、書いたり話したりする力
- ・清書の前に文や文章を自分で読み返して適切に整えること

(授業づくりの視点から)

- ・指導事項を踏まえた単元構想
- ・教材中心の授業ではなく、発達段階や育成したい資質・能力に応じた言語活動の設定

図1 指導者の意識調査や聞き取りから見てきた課題

そこで、指導者が、学習内容について年間の見通しをもつことを大切にし、必要に応じて、特定の指導事項を学期や学年を越えて反復的に扱い、単元や領域を越えて活用する機会を設定することとした。さらに、児童が今までの学びを自覚し、育成した資質・能力を主体的に今後の学習に生かすことで、育成した力が螺旋的に高まることを「学びがつながる」と捉え、具体的な手立てとして以下の3点を取り上げる。

(1) 年間を見通した授業づくり

指導者は、「情報の扱い方に関する事項」と「読むこと」「書くこと」の関連性を確かめ、単元の中で育成したい資質・能力を明確にしておく必要がある。そこで、指導者は教材と指導事項が概観できるマトリックス型の年間指導計画(図2)を基に重点となる指導事項を確認したうえで、単元を構想する。それにより、年間を見通し、他の単元や同領域の指導事項のつながりを踏まえた授業実践を通して、児童の資質・能力が積み上がることをねらう。

令和元年度		国語科年間指導計画		内容						
月	時数	指導事項							C 表現	
			(1)言語事項(領域)							
			ア	イ	ウ	エ	オ	カ	ク	ク
			基礎的・基本的な知識・技能の習得	読者の立場から、文章の構成や表現の工夫などについて、理解を深め、表現の工夫などについて、						

図2 マトリックス型の年間指導計画(一部)

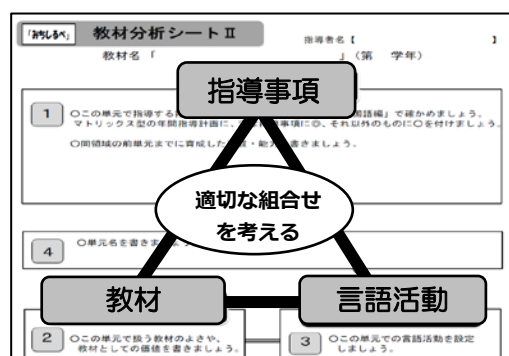


図3 「教材分析シートⅡ」(一部)

(2) 指導事項を踏まえた教材分析と単元構想

単元で育成を目指す資質・能力をより明確にして単元を構想するために、まず、当センターの平成28年度研究成果物「みちしるべ」の「教材分析シートⅡ」(図3)を活用する。このことにより、指導事項と教材、指導事項に適した言語活動の適切な組み合わせを考えることができる。

単元プランシート		指導者名【 】	
第 学年	指導領域【 】	(教材名【 】)	
育成したい資質・能力			
単元名【 】			
児童の実態		これまでの学習との関連	
次 時	学習のねらい	学習活動	具体的な支援の手立て
1			

図4 単元プランシート(一部)

次に、単元プランシート(p. 2の図4)を用いて、単元計画を立てる。シートには、指導事項に関わる児童の実態とこれまでに学習した内容や教材について記入する。さらに、各時間のねらいと学習活動はもとより、評価規準に基づく概ね満足できる児童の姿を書き込む。必要に応じて、準備物や留意点、関連書籍、授業で見取った児童の学びの姿等を書き加える。

単元構成については、指導の意図を明確にするとともに、児童が言語活動に向かう過程で、必然性を感じて情報を収集して整理したり、それらの関係を理解して用いたりするといった児童の思考の流れに沿ったものとする。単元の第一次では、指導者が提示するこの単元での学習のゴールや言語活動のモデルを基に、児童が単元で何をどのように学習するのかについて考える時間を設定する。第二次は、ねらいに応じた言語活動を遂行する過程で必要な資質・能力を段階的に育成する学習過程とする。第三次では、第二次で育成した資質・能力を生かす場を設定する。さらに、単元全体を通して育成した資質・能力を振り返る活動に取り組み、児童自身が学びを自覚することで、他の単元や同領域での学習に生きる汎用的な能力に高められるようにする。

(3) 振り返りシート、成果物等を用いた児童の見取りと活用

児童が、各時間と単元の終末に自己評価を行うための「学びの足あとシート」(図5)を作成・活用し、学びを自覚し、次の学びへとつなげることをねらう。

第一次で児童が指導者とともに考えた学習活動を指導者が「学びの足あとシート」に記載し、第二次に配付する。児童はこのシートを使うことにより、目的意識と見通しをもって学習に臨む。さらに、指導者は、単元を通して、資

質・能力を確実に育成するために、各時間の振り返りのポイントや達成のポイントを示す。ポイントは、評価規準に照らし合わせたものとする。各時間の始めに、ポイントを確認することで、児童自身が目的に応じて読んだり書いたりすることを意識することをねらう。

各時間の終了後に指導者は、授業中の児童の様子と振り返りの記述、成果物等を基に、次時以降の授業で必要になる個に応じた手立てを具体的に考えたり、学習活動を見直したりする。また、児童は、単元の終末に単元全体の振り返りとして、分かったことやできるようになったこと、どのようにしてできるようになったのかを単元のめあてと照らし合わせて記述することにより学びを自覚して、その後の学びにつなげる。

このように、毎時間、指導者と児童の間でシートをやり取りすることで、児童自身が資質・能力

学びの足あとシート 教さい名「アップとルーズで伝える」 学習のゴール 段落どうしの関係をとらえ、説明のしかたについて考えよう。		4年組 番号前	
7	2	1	
学習したことを生かして、これまでに学習した説明的文章を読み、学習全体を振り返る。	段落どうしの関係を考える。	学習の見通しをもつ。 ・学習計画を立てる。	学習活動
/	/	/	日付
筆者は自分の考えを伝えるためにどんな説明の工夫をしていますか。	振り返りや達成のポイント		ポイント
			今日の振り返り

図5 「学びの足あとシート」(一部)

の高まりや学習で達成したこと、課題となったことを自覚し、次時の学習の見通しをもつ手立てとする。なお、「学びの足あとシート」は、児童が自身の学習状況をつぶさに捉えることができ、指導者が児童の学習過程での理解や思考の状況を確認しつつ、変容を見取ることで授業改善に活用することができるように、一目で見渡せるものにする。

Ⅳ 研究の進め方

1 研究の方法

- (1) 派遣研究員受入校の児童の質問紙および指導者の意識調査や聞き取りから、各校の国語科における学習の課題を把握し、本研究の目標に沿って学校支援の内容を設定する。
- (2) 派遣研究員受入校の実態を踏まえ、指導者とともに、指導の意図を明確にした授業づくりに取り組む。
- (3) 授業中の児童の様子と振り返りシート、成果物等を基に、指導者と協議し、授業の見直しを行う。
- (4) 授業中の児童の様子と振り返りシート、成果物、児童および指導者の意識調査から、目標とする資質・能力を育成する授業づくりが実施できたかについて検証する。
- (5) 派遣研究協議会を実施し、各校での取組について交流・協議する。
- (6) 各校での取組内容、成果と課題についてまとめる。

2 研究の経過

4月	研究構想、研究推進計画の立案	11月	児童質問紙および指導者の意識調査(第2回)の実施
4月～11月	派遣研究(近江八幡市、高島市、大津市、米原市の小学校各1校、原則各校週1回派遣)		第2回派遣研究協議会(研究の成果と課題、研究のまとめ方)
6月	児童質問紙および指導者の意識調査(第1回)の実施	11月～12月	研究論文原稿執筆
7月～8月	第1回派遣研究協議会(1学期の取組の成果と課題、2学期の方向性)	1月	研究発表準備
夏季休業中	2学期に向けた授業づくり	2月	研究発表大会
		3月	研究のまとめ

文

献

1) 文部科学省「小学校学習指導要領(平成29年告示)解説国語編」、平成30年(2018年)

吉田裕久・水戸部修治『平成29年版 小学校 新学習指導要領ポイント総整理 国語』、東洋館出版社、平成29年(2017年)

滋賀県総合教育センター「国語で正確に理解し適切に表現する資質・能力を育成する小学校国語科の授業づくり」、平成31年(2019年)

滋賀県総合教育センター「児童の学びを深める国語科の授業づくり」、平成29年(2017年)

研究協力校

近江八幡市立桐原東小学校
大津市立富士見小学校

高島市立新旭北小学校
米原市立米原小学校

研究協力員

近江八幡市立桐原東小学校
高島市立新旭北小学校
大津市立富士見小学校
米原市立米原小学校

森岡 稚葉 稲留 翔太 北川 奈津子
大谷 莉音 堀居 真帆
福居 みどり 石田 美穂 筈井 健
杉浦 彩 東田 由香
武田 志絵 杉中 嵩基

目的に応じて「読むこと」ができる児童の姿を目指す 小学校国語科の授業づくり

－「情報の扱い方に関する事項」と「読むこと」を相互に関連させて－

I 研 究 の 内 容

本研究では、情報と情報の関係について理解したり、情報を取り出して整理したりすることで、必要な情報を選択して読む児童の学びを、目的に応じて「読むこと」ができる児童の姿と捉えた。その姿が表出されるためには、児童自身が学習のゴールにたどり着くために必要となる力は何かを考え、学習に取り組むことが重要である。さらに、児童の学習活動を必然性のあるものとすることや、振り返りを通して「何を」「どのように」学んだかを児童が自覚することで、汎用的な読み方を積み上げることができる。

1 目的意識をもって読むことができる場面の設定

第2学年の単元「どうぶつの体のすごいところを見つけて、ひみつクイズをつくろう」(教材名「ビーバーの大工事」東京書籍)では、教材文を読む必然性が生まれるように、「教材分析シートⅡ」を用いて児童のこれまでの学習経験を確認、実態に適した言語活動を設定した。「情報の扱い方に関する事項」と「読むこと」を相互に関連させ、事柄の順序の関係を理解することによって、教材文を「どのような順序で書かれているのか」という視点で読むことにより、重要な語や文を考えて選び出す力が育つことをねらいとした。そこで、教材文で習得した力を活用しながら、並行読書材を読む単元構成とし、指導事項に関わる確かな資質・能力の育成を図った。

本単元の第1時で、児童が見通しと目的意識をもつことを意図した授業を行ったところ、次のような学習活動が展開された。児童は始めに、ビーバーについて驚いたところを見つながら教材文を読んだ。次に、ペアでの交流を通

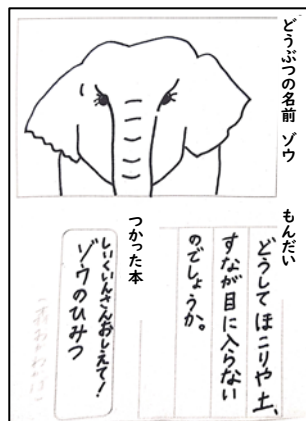


図1 指導者が作成した言語活動のモデル

して、驚くところが人によって異なることに気付、友達に伝えたいという思いをもった。そして、動物の体の驚いたところを見つけてひみつクイズを作るという学習のゴールを知り、

言語活動のモデル(図1)を見たことにより、児童はこの言語活動に取り組みたいという思いをもった。ここで、指導者が学習のゴールに到達するためにどのように学習を進めたらよいかを問かけると、図2のように児童はこれまでの学習を想起し、次々に自分の考えを発表した。

このように、児童自身が、どのような学習が必要になるかを考える活動は、何のために教材文を読むのかという目的意識や、学習に対する見通しをもつことにつながった。

指導者 動物のひみつクイズを作るためにどうしたらいいかな。
児童1 図鑑を見て調べて、練習する。
児童2 図鑑を詳しく見て、クイズにできそうなものを探す。
指導者 探すためのポイントは？
児童3 ひみつ。
児童4 体のひみつ。
指導者 体のひみつを見つければいけないね。
児童5 ビーバーのひみつを例文にして、ビーバーのクイズを作ってから、図鑑のクイズを作る。
児童6 図鑑を見て、調べてメモをする。
児童7 どの動物にするか決めて、図鑑を読んでクイズを作って練習する。
児童8 図鑑を見て、分かったことや知ったことを問題にする。
児童9 ビーバーを見て分かったことや知ったことを問題にして出す。
児童10 中休み・昼休みや家で図鑑を読む。
児童11 図鑑を紹介する。
児童12 ビーバーでクイズに使うところに線を引いて、付箋を用意して「問題を作るな」と思うところに貼る。次の国語の時間にそれを見て(クイズ)を作る。

図2 単元の導入での指導者と児童のやりとり(下線は筆者)

2 段落相互の関係を捉える学習活動

第4学年2学期の単元「段落どうしの関係をとらえ、説明のしかたについて考えよう」(教材名「アップとルーズで伝える」光村図書)では、その後の「書くこと」の単元での学習に生かすため、筆者の説明の仕方の工夫をまとめることを言語活動として位置付けた。これにより、段落相互の関係に着目しながら、叙述を基に筆者の考えとそれを支える具体的な事例との関係について捉える力が育つことをねらいとした。

1学期の単元「きょうみをもったところを発表しよう」(教材名「大きな力を出す」「動いて、考えて、また動く」光村図書)で、段落相互の関係を捉えることに課題が残ったことを踏まえ、第5時に、ホワイトボード

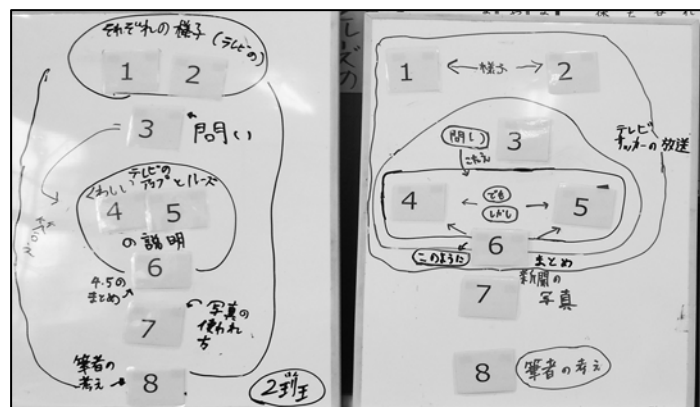


図3 児童が段落相互の関係を表した図

ドを使ってグループごとに、叙述を基に段落相互の関係を整理する学習活動を行った。児童は、図3のように文章中から根拠となる言葉や、前時までに考えた各

段落の小見出しを手がかりにして関係を考えた。「アップとルーズで伝える」の振り返りには、「段落と段落がどのようにつながっているかについて、強調しているか対比しているかに注目して説明の仕方を見つけた」という段落相互の関係に着目した記述や、図4のように単元での学びを自覚する記述があった。このことから、児童は必要な情報を選択して読んでいることが分かった。

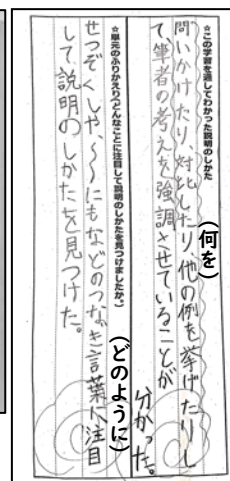


図4 単元の振り返り(括弧内は筆者)

さらに単元の終末では、第3学年で既習した教材文「すがたをかえる大豆」を読む活動を設定した。再度、ホワイトボードを使って段落相互の関係を捉え、説明の仕方について考える活動を行うことにより、本単元で育成した資質・能力を活用することを意図した。段落相互の関係に着目して叙述に線を引いたり、表に整理したりしながら読む児童の姿を見取ることができた。単元で習得した資質・能力を既習教材で活用する場面を設定したことは、児童が身に付けた力を確かめる学習活動となった。

3 学びのつながりを重視した授業づくり

指導者は、児童が学びをつなぐために系統性を重視し、児童の実態に応じた授業づくりに取り組んだ。各単元で児童の学習の成果と課題を見取り、必要に応じて単元の中やそれ以降の単元構想に生かして授業改善を図った。7ページの図5に1、2学期を通して行った授業づくりの流れを示した。

第6学年5月に学習した「文章を読んで自分の考えをもとう」の単元の終末では、教材文を読んで理解したことについて考えをまとめることができたが、筆者の論の進め方に対して考えをもつことは十分ではなかった。また、6月に学習した単元「説得ポイントを見つけて新聞の投書を書こう」では、四つの投書を読み比べる時に、共通点を見つけて図示することに難しさを感じており、情報を整理することが課題であった。

11月の単元「資料を効果的に活用し、私たちの町の未来を語ろう」においては、5月と6月に実施した単元での学習の実態に応じて授業づくりを行った。本単元は、「読むこと」と「話すこと・聞くこと」の複合単元である。国語科の「読むこと」の学習の後には、総合的な学習の時間において取り組んだ防災や環境の学習と関連させて、自分たちの学区の課題から町の未来について考える学習を行う。それを踏まえて「話すこと・聞くこと」の単元の終末では、地域ボランティアに向けて未来につながる町づくりについてプレゼンテーションを行うことを言語活動として位置付けた。

	実施月・単元名・重点指導事項 ()内の教材は全て東京書籍	成果(○)と課題(△)	支 援
1 学期	5月 「文章を読んで自分の考えをもとう」 (イースター島にはなぜ森林がないのか) ・情報の扱い方に関する事項ア ・読むことア	△事実と意見に分ける △文章全体の構成から要旨を捉える △筆者の論の進め方に対する考えをもつ △何をどのように学んだか自分の学びを自覚する	・全文シートを用いて、文章全体の構成を捉えやすいようにする ・原因と結果の係に目し、事実と意見に分けられるようにする ・要旨のモデルを示す ・要旨を捉えるポイントを再確認する
	6月 「説得ポイントを見つけて新聞の投書を書こう」 (新聞の投書を読み比べよう) ・情報の扱い方に関する事項イ ・読むことウ (書くことウ)	○文章全体の構成を捉える △説得の工夫を見つけるために共通点を見つけて図示する	・四つの投書における文章全体の構成や説得の工夫の共通点や相違点を色分けしたり囲んだりして整理するモデルを示す
2 学期	11月 「資料を効果的に活用し、私たちの町の未来を語ろう」 (町の幸福論—コミュニティデザインを考える) ・情報の扱い方に関する事項イ ・読むことウ (話すこと・聞くことウ)	○文章全体の構成から要旨を捉える △段落相互の係に目しながら、筆者の主張と事例との係などについて捉える △説得力を高めるための工夫として、論の進め方と資料を使うことの二つの視点で考える	・これまで学習した説明の工夫を想起する時間を設定する ・「何に注目して読むことによって本時のねらいを達成することができたか」という自分の学びを自覚するために視点を示した振り返りを行うことで、文章の様々な係に注目して読む選択肢を増やせるようにする
	「学びの足あとシート」単元の振り返り ・内容を整理することができた。整理することで、考えと事例や、考えと表やグラフの係が分かった。 ・文の中から、大切な言葉を見つけたり、序論や本論に分けたり、写真や図の役割が考えられるようになった。何度も読んだり、今までやってきたことを振り返って思い出したりして、分かるようになった。	○情報と情報を線でつなぎ、関連付ける整理の仕方を理解する ○整理することによって、説得力を高めるために、論の進め方と資料の効果を考えて使っていることに気付く	・全文シートに接続語、筆者の意見と事例、資料と文章を結び付けて印をつけて読むようにし、段落相互の係を意識できるようにする ・筆者の意見と事例、資料を関係付けてワークシートに整理する時間を設定する

図5 年間を通して学びの系統性を重視した授業づくり

第一次では、これまでに学習した説明的な文章には、どのような説明の工夫があったかを想起する学習を設定した。児童はこの活動を通して、説明の工夫を探すという読む目的をもち、読むときの着眼点を意識することにつながった。第三次では、筆者が説得力を高めるために、どのような論の進め方や資料の使い方をしているかを全体の構成が分かるような図示をして、情報を整理する時間を設定した(図6)。児童は、筆者の説明の工夫に印をつけた全文シートや、「学びの足あとシート」に記した着眼点をヒン

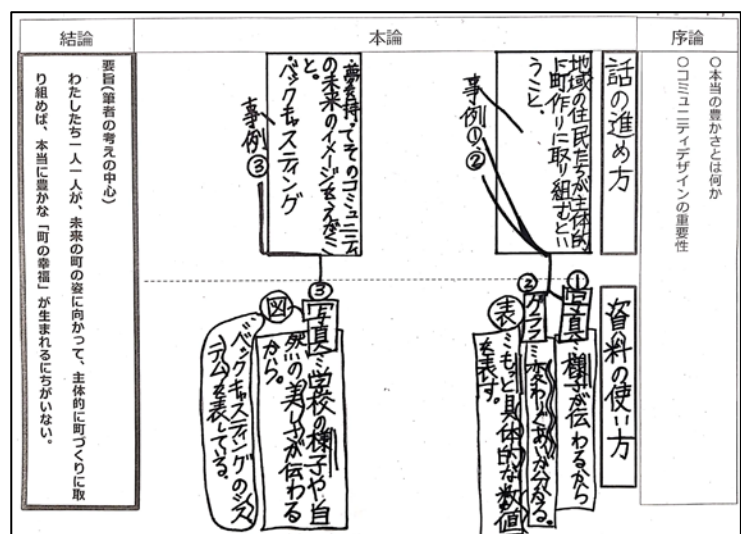


図6 考えと事例・筆者の考えと資料の関係について整理し、説明の工夫を表した児童のワークシート

トにすることで、筆者の考えとそれを支える事例や、考えと資料の関係を線でつないで関係付けて整理することができた。また、整理することを通して、筆者が説得力を高めるために、効果を考えて資料を選んでいることや論の進め方について考えることができた。その後、プレゼンテーションに向けて教材文の事例を用いてフリップにまとめる活動では、表したいことを羅列するだけでなく事例の要点を絞ることや、簡潔に図示してまとめることができ、情報と情報の関係の表し方を理解して使おうとする姿が見られた。さらに、「話すこと・聞くこと」の単元で行う未来につながる町づくりについてのプレゼンテーションに向けて、自分たちの意見に合う事例を選び、説得力を高めるために写真などの資料を適切に選択する姿が見られた。

以上のことから、「情報の扱い方に関する事項」と相互に関連させて、年間を通して育成する力を明確にしたうえで学習活動を設定し、児童の実態に応じて反復的に指導事項を扱うことが重要だと分かった。また、今回のようにプレゼンテーションの題材としてこれまでの総合的な学習の時間の取組を生かしたことは、児童にとって必然性のある学習活動となり、意欲をもって学習に向かうことにつながった。

Ⅱ 成 果 と 課 題

1 成果

(1) 目的に応じて読む児童の姿

児童が自覚した学びがその後の学習につながっているかについて、意識調査を実施した。「教科書の文章を正確に理解するために、あなたはどのようにして読みますか」という設問に対する児童の自由記述をA～D群に分類した(表)。事前(6月)と事後(11月)の結果を比較すると、事後にA、B群が現れ、これまでの学習における説明的な文章の読み方を自覚している児童が増加している(図7)。

また、A群は既習の単元、現在の単元、両方の指導事項に関わる読み方を具体的に書いていることから、両学期の学びがつながっていることが分かる。

表 A群からD群の分類と具体的な児童の記述(一部)

グループ	視点	具体的な児童の記述(一部)
A群	既習の単元、現在の単元、両方の指導事項に関わる説明文の読み方を具体的に書いている	・グラフなどが出てきたら、そのグラフを説明している文を探す。他にも何回も出てきている言葉をキーワードとして探す。 ・序論と結論でいいたいことを見つけて、次にグラフなどが書いていたら、グラフを説明している文章を見つける。
B群	既習の単元、現在の単元のいずれかの指導事項に関わる説明文の読み方に具体的に触れている	・文がどのように構成されているか調べ、大切なところに線を引く。 ・写真などを見て、文とつながっているところを見つける。
C群	説明文の読み方に触れているが具体的ではない	・筆者の言いたいところを考える。 ・キーワードをもとに繰り返し読む。
D群	説明文の読み方に関わらない	・繰り返し読む。 ・声に出して読む。

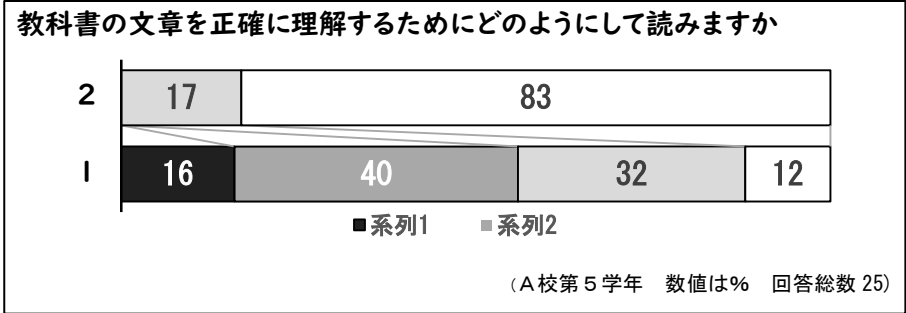


図7 児童質問紙調査の記述内容の比較

さらに、児童の振り返りの記述からは、蓄積した読み方から目的に応じて必要な情報を選択して読んでいることが分かった(図8)。

- ・要旨を捉えるために、1学期に学習したことを思い出した。まず、序論・本論・結論に分けた後に、序論と結論に注目して筆者の考えを探した。繰り返し出てくる言葉にも注目した。
- ・要旨をまとめる時には、結論に注目した。他にも、文の終わりの「～だと思う」「～したい」は筆者が強調しているサインなので注目した。
- ・筆者が読み手を説得する工夫を見つけるために、1学期に学習したように題名と関連する言葉を探したり、繰り返し使われている言葉に注目したりした。

図8 「学びの足あとシート」の振り返りの記述

このように、毎時間や単元の終末に既習事項と着眼点を意識することができる振り返りを積み上げることで説明的な文章の読み方を蓄積することができる。蓄積することにより、文章を読む際に、何に注目するのかということを見出し、児童自身が分かったうえで読むというメタ認知的な思考を発揮して必要な情報を選択し、目的に応じて読むことができることが分かった。

(2) 授業づくりに対する指導者の意識の変容

授業づくりについてのアンケートや聞き取りから得られた指導者の感想を右に示す(図9)。年間を見通した指導事項の確認を行い「教材分析シートⅡ」「学びの足あとシート」を作成・活用したことで指導者は、国語科の授業づくりのポイントを見いだしたことがうかがえる。

- ・「教材分析シートⅡ」の指導事項、教材の特徴、関連する図書、言語活動を適切に関連付けて授業づくりを行うことが大切だと思った。
- ・振り返りに視点を示すことが大切だと分かった。「何がどう分かったか」についての児童の振り返りから、子どもの学びを見取ることで、次の授業に生かすことができる。

図9 指導者の感想(自由記述および、聞き取り)

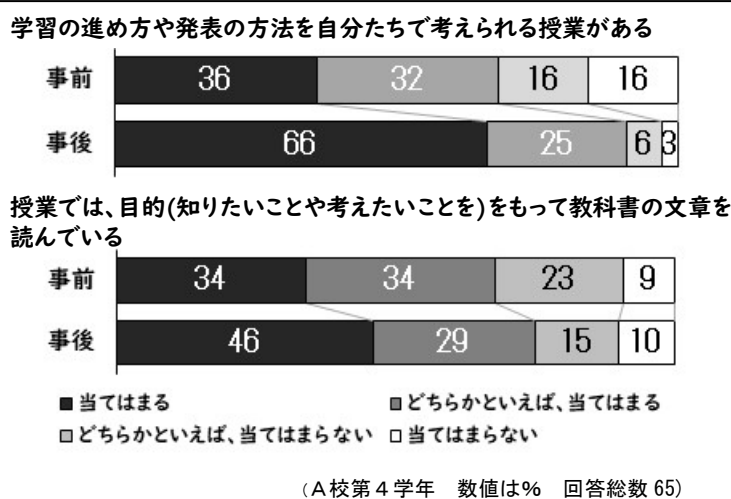


図10 児童質問紙調査の結果

児童は、説明文の全文を載せたシートに小さいまとめがいくつかあることや、事例の前に問題提起があることを書きこんでいた。児童が学年相応の指導事項が身に付くためには、文章中の情報である筆者の意見と事例、筆者の意見と資料をつなげて整理することが必要だと考え、授業を設定した。授業を通し、児童が情報と情報をつなげて整理するところまで成長したことを感じている。

図11 B校指導者の派遣研究協議会での感想

から必要な情報を捉える力を高めるには、「情報の扱い方に関する事項」と「読むこと」を関連させることが有効であるとの指導者の言及がみられた。

2 課題

- (1) 小学校6年間の学びに系統性をもたせ、児童の資質・能力の確かな育成につなげるために、授業づくりの視点を校内研究と連動させて指導者が学び合うなど、学校全体の取組として「学びの足あとシート」をポートフォリオ等の形式で蓄積し、継続的に取り組む必要がある。
- (2) 必然性のある学習活動を設定し、その効果を高めるには、各学校のカリキュラム・マネジメントとともに、学校行事や総合的な学習の時間、生活科等とも相互に関連させた単元構想が必要である。

目的に応じて「書くこと」ができる児童の姿を目指す 小学校国語科の授業づくり

－「情報の扱い方に関する事項」と「書くこと」を相互に関連させて－

I 研 究 の 内 容

1 育成を目指す資質・能力を明確にした授業

学習指導要領解説では、「書くこと」の学習過程に沿って指導事項が位置付けられている(表1)。この学習過程は、指導の順序性を表すものではなく、指導のねらいを重点化するうえで重要である。

単元を構想する際には、育成したい資質・能力を明確にするために、マトリックス型の年間指導計画を用いて1年間の重点となる指導事項を確認した。第3学年では、「書くこと」の情報の収集と内容の検討を行う過程で「情報の扱い方に関する事項イ」の比較や分類の仕方を扱うことに着目した。重点となる「書くこと」の指導事項を確かめると、相互に関連させることで指導の効果が高まると考えられる単元が二つあった(表2)。それらの単元間における学びのつながりを意識し、「情報の扱い方に関する事項」を反復的に指導することにより、比較や分類の仕方の定着が図れると考えた。

表2 「情報の扱い方に関する事項」と「書くこと」の指導事項の共通する内容(下線は筆者)

単元の教材名	情報の扱い方に関する事項	書くこと
「気になる記号」	イ 比較や分類の仕方、必要な語句などの書き留め方、引用の仕方や出典の示し方、辞書や事典の使い方を理解し使うこと。	ア 相手や目的を意識して、経験したことや想像したことなどから書くことを選び、集めた材料を比較したり分類したりして、伝えたいことを明確にすること。
「食べ物のひみつを教えます」		ウ 自分の考えとそれを支える理由や事例との関係を明確にして、書き表し方を工夫すること。 <u>比較や分類の仕方を活用</u>

1学期の単元「ざいりょうを集めて、ほうこくする文章を書こう」(教材名「気になる記号」光村図書)では、身の回りにある記号が何を伝える役割をしており、そのためにどのような工夫がされているかについて報告する文章を書くことを言語活動に位置付けた。児童は伝えたい記

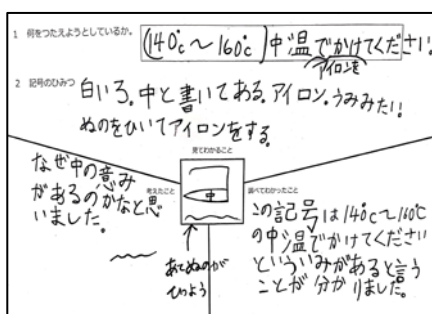


図1 記号についての情報を整理した児童のワークシート

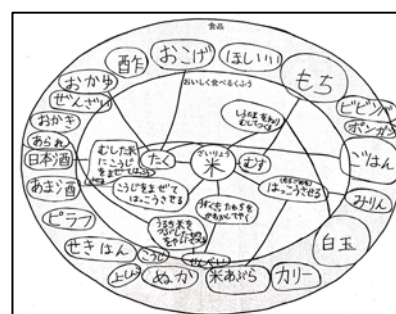


図2 食品等について整理した児童のワークシート

号について書くために、記号に関する複数の情報を集め、共通の性質ごとに分けて、報告する事柄を選択する必要があった。そこで、指導者は記号を「見て分かること」「考えたこと」「調べて分かったこと」の三つの視点で分析し、情報を整理するワークシートを児童に提示した(図1)。視点を示したことは、児童にとって報告文を書くための情報を集めることに役立った。しかし、目的に応じて必要な情報を収集することや適切な情報を選択することが不十分だったため、伝えたいことに合った文章が書けない児童がいた。指導者と授業についての振り返りを行ったところ、「必要な情報の量は確保できたが、伝えたいことを明確にするための情報を選択できていなかった。つまり、この単元では、内容の検討の過程に力を入れる必要があったが、全ての学習過程に全力で取り組んでしまい、重点化

が弱かった。」という気付きがあった。

そこで、2学期の単元「『食べ物〇〇へんしんまきもの』を作ろう」(教材名「食べ物のひみつを教えます」光村図書)では、「教材分析シートⅡ」を用いて重点となる指導事項「書くこと」と言語活動の適切な組合せを確認し、自分の考えとそれを支える事例の関係を明確にして説明する文章を書くことを学習のゴールとした。食材の食べ方を説明する「食べ物〇〇へんしんまきもの」を作るという言語活動の遂行のために適切な情報を選択することができるよう、1学期の課題を踏まえ、全ての児童が「書くことア」の指導事項を身に付けられるように、既習の比較や分類の仕方を見直した。「食材をおいしく食べる工夫」と「食品」の事例を複数集め、その関係を並べたり、線で結んだりして整理したことで(p.10の図2)、比較や分類がしやすくなり、自分が伝えたい内容に適した事例を選ぶことにつながった。

2 児童の思考の流れに沿った単元構成

(1) 情報の扱い方の習得と活用を意識した学習活動の設定(第3学年)

児童が言語活動に取り組む過程で、わかりやすく説明するために必要な情報を収集し、目的に応じて活用できることをねらいとした学習活動を設定した。

単元「『食べ物〇〇へんしんまきもの』を作ろう」では、選んだ食材をおいしく食べる工夫と食品の事例を集めるために、科学読み物での調べ方を学ぶという必然性のある学習活動を設けた(図3)。どこにどのようなことが書いてあるのか、知りたいことをどのように調べられるのかについて、理解して読むことができることを学習のねらいとした。「目次」「索引」を使って調べる方法を学ぶ際には、前単元の教材文の題材である大豆につ



図3 科学読み物を読み比べている児童

いて書いてある科学読み物を用いた。ある児童から、「教科書で読んだ『すがたをかえる大豆』の筆者と本の名前が載っている」という発言があったため、最後のページを全員で確かめることを促すと、参考文献の一覧の中に掲載されていることが分かった。出典の示し方を指導したいという指導者のねらいと児童の興味が一致した場面であった。指導者はすかさず、書き手が他の人の書籍の内容を参考にした場合、読み手がその引用元を確認できるように出典を明らかにすることは、著作権の尊重と保護のために必要であることを説明した。さらに、「奥付」には、書名や筆者の名前等が明記されていることも知らせると、児童は「自分が巻物を書くときも本で調べるから、同じように書かないといけない」という思いをもち、出典を示す意図を理解したうえで、自作の巻物に書き表した(図4)。その後、児童は巻物を作成する過程で、何度も科学読み物に立ち返って必要なことを調べ、記録していた。

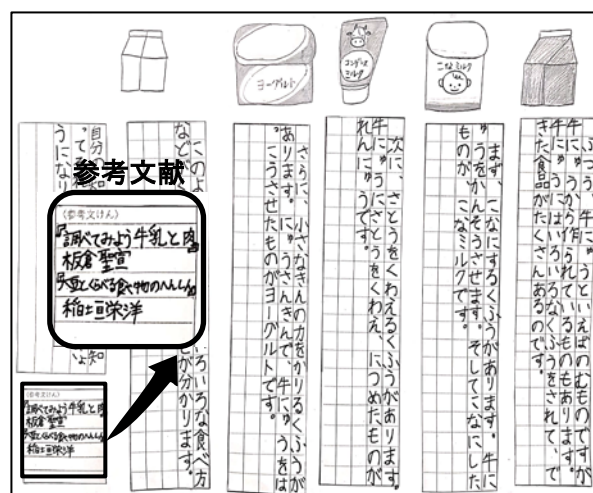


図4 児童が作成した巻物(囲みは筆者)

前等が明記されていることも知らせると、児童は「自分が巻物を書くときも本で調べるから、同じように書かないといけない」という思いをもち、出典を示す意図を理解したうえで、自作の巻物に書き表した(図4)。その後、児童は巻物を作成する過程で、何度も科学読み物に立ち返って必要なことを調べ、記録していた。

このように、児童の思考の流れに沿って習得と活用を往復する学習活動を行ったことで、収集した情報を用いてわかりやすく説明するという目的に応じた文章を書くことにつながった。

(2) 児童による評価を課題の解決に生かす工夫(第4学年)

「書くこと」の学習において、児童は構成や下書きの活動で文章を完成させてしまう傾向があり、

一度文章を書いてしまうと、修正をすることが難しいという実態があった。そこで、目的に応じて書くことができるためには、児童が学習過程での自身の理解や思考の状況を確認することが大切だと考え、推敲以前の過程で児童による相互評価を単元計画に取り入れた。また、共有の過程と単元の終末には、他の児童からの評価を踏まえて自己評価を行い、単元の学習を通して身に付けた力を実感できることを目指した。

1学期に取り組んだ単元「調べたことを整理して書こう」(教材名「新聞を作ろう」光村図書)、単元「組み立てを考えて書こう」(教材名「自分の考えを伝えるには」光村図書)において課題となったのは、伝えたいことが明確になるように情報を取捨選択できなかったり、適切な表記に修正することができなかったりしたことである。これらの課題を克服するためには、書くことにおいて児童の思考が停滞する場面で手立てを打つ必要があった。

表3 第4学年「書くこと」の単元で扱う教材と重点となる指導事項(下線は筆者)

単元の教材名	情報の扱い方に関する事項	書くこと
『クラブ活動リーフレット』を作ろう	ア 考えとそれを支える理由や事例、 <u>全体と中心</u> など情報と情報との関係について理解すること。	イ 書く内容の <u>中心を明確にし</u> 、内容のまとまりで段落をつくったり、 <u>段落相互の関係</u> に注意したりして、文章の構成を考えること。

単元「『ここがじまん！A小運動会しようかいリーフレット』を作ろう」(教材名「『クラブ活動リーフレット』を作ろう」光村図書)では、「情報の扱い方に関する事項ア」と「書くことイ」との指導事項を相互に関連させ、重点的に扱った(表3)。前単元の教材文「アップとルーズで伝える」で学んだ筆者の説明の仕方の工夫を生かし、他の小学校に自校の運動会を紹介するリーフレットを作ることと言語活動に位置付けた。単元を構想するにあたり、指導者自身が言語活動のモデルを作成し(図5)、

児童の思考の流れを予想したうえで、適切な手立てが取り入れられているか、単元プランシートで確認しながら単元を計画した。指導者は、構成から推敲までの活動における児童の姿を想定し、それらの学習のねらいに合った評価の場を設けることにした(図6)。

第4・5時の学習では、構成を考える前に、まとめとなる「終わり」の部分の内容を構成表に書き、伝えたいことの中心を明らかにした。その後、「終わり」に対してタイトルと「中」の事例が適切であるか、指導者が定めた観点を基に児童同士がペアやグループでアドバイスをし合う活動を行った。この時、児童は、伝えたいこととそれを支える事例の関係を確かめることに加え、運動会



図5 指導者が作成したリーフレットのモデル

時	学習内容	学習活動のポイント
1	○単元のめあてを確認し、学習の見通しをもつ。	
2	○「アップとルーズで伝える」や指導者のモデル作文で説明の仕方の工夫を確かめる。	構成表を友達と読み合い、定めた観点を基にアドバイスをし合う。
3	○リーフレットで伝えたいことの中心を決め、内容と適切な事例を選ぶ。	
4・5	○文章の組み立てを考え、構成表にまとめる。	記述したものを学級全体で読み合い、文章のよさを共有する。
6	○構成表を基に下書きをする。	
7	○清書をし、写真と表紙を加えてリーフレットを完成させる。	リーダーチャートやコメントによる相互評価と、自己評価を行う。
8	○リーフレットを読み合って感想を伝え合う。	

図6 単元「『ここがじまん！A小運動会しようかいリーフレット』を作ろう」の指導計画(全8時間)と児童が課題解決を図る学習活動のポイント

A児はリレーを事例として挙げ、「全力で取り組むこと」を伝えるため、バトンパスと走者を応援の様子について文章にしたが、これで伝わっているのか悩んでいた。指導者はA児の文章を取り上げ、全体にアドバイスを求めた。

- 児童B リレーのことを書くなら、あきらめずに走る様子を書くことで「全力」は伝わると思う。
- 児童C リレーは「全力」を伝えるのに合っているけれど、バトンパスと応援は両方必要かな。
- 児童D でも、先生が作ったリーフレットにも、リレーと応援が一緒に書いてあったよね。
- 児童C それは「競い合うこと」の事例だからだよ。
- 指導者 つまり、「全力」がしっかり伝わる内容に絞って書くということですね。Aさんはみんな話を聞いて、どう思いましたか。
- 児童A 走っている場面の写真を使おうと考えているから、応援のことまで書かなくても「全力」を伝える内容になるかと思いました。

図7 第6時での指導者と児童のやりとり

のプログラムや写真を見ながら自慢できることを再考し、事例選択やその順序について友達にアドバイスを求める姿が見られた。

第6・7時の学習では、構成表を基に下書きと清書を行い、相手を指定せず作品を自由に読み合う場を設けた。12ページの図7のように困っている児童の悩みを全体で解決したり、児童がよく書けていると評価した作品を学級全体で取り上げてそのよさを分析したりするやりとりがあったことで、各自が自分の文章をよりよく整えるための視点をもつことにつながった。

リーフレット完成後の第8時では、図8のシートを用いてペアで五つの観点から相互評価を行った。これらの観点は、これまでの学習過程において確認したことや読み手が文章を読んで感じることを、相手意識をもって作成したことを基準に設定した。児童は、グループでも感想を述べ合い、自由記述による相互評価も行った。児童のコメントには、「タイトルの言葉を『終わり』に使っているからじまんしたいことがよく伝わる」や「写真と事例が対応していて、説明がわかりやすかった」等、五つの観点を基準とした評価ができている感想が多くあった。そして、単元全体を振り返り、参考になった他の児童からの評価を踏まえた自己評価を行い、「学びの足あとシート」に記録した。児童は、他の児童からの評価と自分のリーフレットを見比べながら、自分の文章のよいところを見つけたり、改めて相手や目的を意識した文章になっているかを確認したりしていた。

このように、学習過程に応じて、課題の解決を図る評価を位置付けたことにより、児童は説明の仕方を工夫し、わかりやすく伝えるという目的に合った文章へと修正を重ねる姿が見られた。

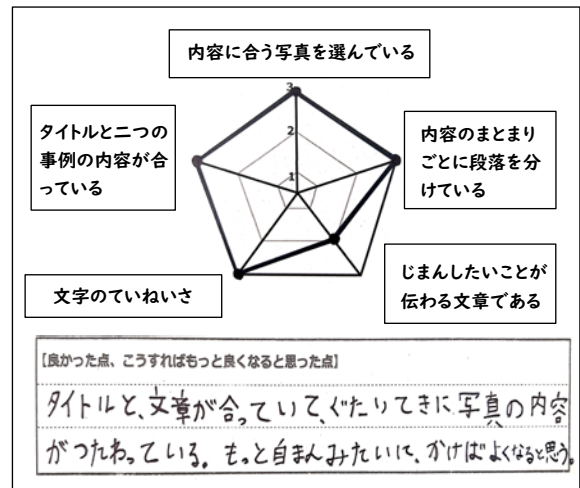


図8 五つの観点と記述による児童の相互評価を記録したシート

3 振り返りシート等を用いた児童の見取りと活用

「学びの足あとシート」を次時以降の授業に活用することで、児童が学びを自覚し、学びをつなげることができることを目指した。特に、児童が、めあてと達成のポイントに照らし合わせて記述したことに着目した。

第4学年の単元「組み立てを考えて書こう」(教材名「自分の考えを伝えるには」光村図書)では、「外国人観光客にお薦めしたい日本の季節」というテーマで意見文を書く活動を行った。題材の設定の過程で児童が記した振り返りには、「季節の好きなところを集めることはできたが、理由と事例に分けるのが難しい」とあった。そのため、指導者は次時に、理由と事例の組合せが適切ではない作品を意図的に提示し、修正すべき点を全体で考えた。この活動を設定したことにより、書き手の意見に説得力をもたせるには、理由とそれを裏付ける事例の整合性が必要であることが分かり、児童は自分の考えに対する理由と事例のつながりを判断したうえで意見文を書くことができた。指導者が、授業での学習の様子や成果物、振り返りの記述を基に児童の課題を見取り、必要な活動を授業に追加・修正するといった手立てを講じたことで、指導を改善することができた。

また、「学びの足あとシート」と、単元で使用したワークシートや学習作品等の成果物を綴じ、蓄積した。単元「『ここがじまん! A小運動会しようかいリーフレット』を作ろう」では、児童が蓄積したシート等から自ら既習事項を確かめ、既習の説明の仕方の工夫をリーフレットの作成に生かそうとする姿があった。このように、学習の記録を残すことは、児童が他の単元の学習を行う際に、既習事項を確かめ、学びをつなげることに有効であった。

Ⅱ 成 果 と 課 題

1 成果

(1) 目的に応じて書く児童の姿

「情報の扱い方に関する事項」と「書くこと」の指導事項を関連させ、指導の意図の明確化を図った授業づくりを行ったところ、以下の児童の姿が見られるようになった(図9)。

A校の児童の中には、文章を書くことに消極的な児童が複数いた。1学期は指導者による文型の提示や個別の指導があれば文章を書き出すことができた児童が、2学期の単元では、目的に応じた文章を書くための工夫に気付き、自ら文章を整えることができるようになった。その中の一人であるA児は、相手や目的を意識して文章を書くことによる効果を実感したことを「学びの足あとシート」の振り返りに記述している。他の児童もA児のように、目的に応じた文章を書くために工夫をしたことを振り返りに書いていた。

B校にも、文章を書くことに対して苦手意識をもつ児童が複数いたが、全員の児童が必要な情報を収集し、選択して文章を書くことができた。B児の振り返りの記述からは、必要な情報だけを選択して、簡潔に表現することが伝わりやすい文章になることを実感した様子がうかがえる。

これらの児童の姿から、児童自身が相手や目的を意識し、自分が伝えたいことを読み手に伝わるように書くにはどうすればよいかを理解して文章を書くことができたことが分かる。

A児	最初に「終わり」から書くのがなぜか分からなかったけど、そうしたら「中」の事例がいつもより書きやすく、相手を意識すると字もきれいに書けました。友達と評価し合ったら、自分の学びを確かめられました。
B児	わたしができるようになったのは、文を短くすることです。わたしはいつも長くなってしまうから、そう思いました。文を短くしても、書きたいことが伝わると分かったのでよかったです。

図9 児童の振り返りの記述

(2) 授業づくりに対する指導者の意識の変容

指導者を対象に、授業づくりの取組後に行った聞き取りには、以下のような感想があった。

- ・辞書や事典などを駆使すれば情報が得やすくなり、比較や分類の仕方を知っていれば情報が整理しやすくなることを児童が実感できたため、「情報の扱い方に関する事項」と「書くこと」を関連させた指導の重要性が理解できた。
- ・指導の意図を明確にし、指導事項のつながりを考えて単元構想を行っておくことで、各時間に指導者がすべきことが分かるため、授業での児童の学習の様子をしっかりと見取り、手立てを講じる余裕ができた。
- ・毎時間支援を必要とした児童が数名いたが、「学びの足あとシート」を用いたり、見直しを充実させたりしたことで、全員がゴールまでの見通しをもって、児童自身で学習を進めることができた。

図10 指導者の振り返り

目的に応じて「書くこと」の資質・能力の育成を目指して「情報の扱い方に関する事項」と「書くこと」を相互に関連させ、学びがつながるような授業を行ったことにより、指導者は、指導の意図の明確化や振り返りの活用等の具体的な授業づくりのポイントや効果を理解し、児童の学びの向上を実感することができた(図10)。

2 課題

- (1) 児童が「書くこと」の言語活動の中で習得した「情報の扱い方に関する事項」の知識・技能を、学期や学年を越えて、他の領域や他の単元で幅広く活用できるような指導計画を立て、授業づくりを検討する必要がある。
- (2) 児童が書く活動に対する意欲を高め、目的に応じて「書くこと」の資質・能力が育成できるような、個に応じた多面的・多角的な評価の方法をさらに検討していく必要がある。